

第四節 北部九州の縄文時代の遺跡

北部九州は、国内で縄文時代最古の土器群が発見されている地域であり、また下って終末期には次の弥生時代へと受け継がれる水稻耕作がいち早く伝播した地域でもある。このように時代の先端を歩んだ当地域について、以下では各時期ごとにその特徴を概観する。

草創期

先述したとおり、九州の縄文時代草創期には隆起線文・豆粒文・爪形文・条痕文などの土器群が作られる。長崎県福井洞穴の第3層からは細石器とともに隆起線文土器が出土し、一万二七〇〇±五〇〇年BPの放射性炭素測定年代が示されている。また、その上の第2層でも爪形文土器に細石器が伴う。これは、旧石器時代の終末と縄文時代の開始が同時進行したことを物語っている。

この時期の遺跡は非常に少なく、九州全体でもまだ二十数か所にとどまっており、鹿児島県東黒土田遺跡で貯蔵穴が発見されているが、明確な住居跡は確認されていない。福岡県内では、春日市門田遺跡で器高一八・六センチメートルの浅鉢の爪形文土器が出土している。

早期

早期前半には押型文土器が発達するが、九州内では北部（福岡・長崎・佐賀・大分）と南部（熊本・宮崎・鹿児島）とで地域色が顕著になる。後者の土器が平底で、器壁が厚いのに対し、前者は尖底で、器壁が薄いのが特徴である。

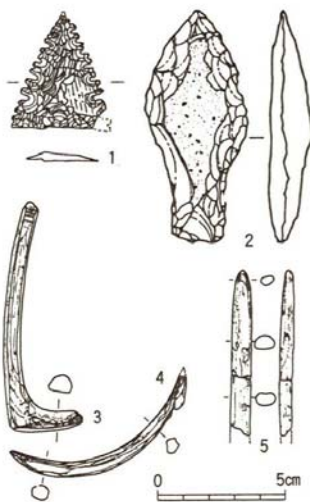
この時期、全国的に生活が安定し、定住化が進む。福岡市柏原遺跡群はこの時期の大規模な遺跡であり、A1-2遺跡では炉跡二基のほか住居跡四軒・土壙墓一九基が検出された。E遺跡でも竪穴住居跡一〇四軒・土壙墓二八基が発見されている。土壙墓は一般的には平面形が方形であるが、なかには木棺墓と推定されるものや、頭部に扁平な石を置いて埋葬したものなどがある。また、遺物では石鏃とともに異形局部磨製石器や石斧・環状石器などが出土している。

大分県本耶馬溪町の粉洞穴^{こなほら}では、早期から後期に及ぶ文化層と六九体の人骨が発見されたが、押型文土器を伴うVI層から九体の埋葬人骨が出土している。

前期

前半期には、九州全域で貝殻文系土器の蠡式土器が普及する。その後、朝鮮半島の櫛目文土器の影響がうかがえる曾畑式土器が西九州に成立し、南部九州へと広がる。

早期終末にはアカホヤ火山灰の噴出により、南部九州では動植物や人間の生活に壊滅的な打撃が与えられる。北部九州でも降り注いだこの火山灰が深刻な影響を与えたと考えられるが、その後の気候の温暖化によって自然環境も回復し、西九州の海岸部を中心に漁労活動が盛んになり、貝塚が形成される。漁具では「西北九州型結合釣針」(第23図3・4)と呼ばれる軸部と



第23図 北部九州の縄文時代漁労具

- 1 石鋸 2 石鈎
3・4 結合釣針 5 ヤス

針部を別々に作って組み合わせて使用する釣針が出現し、佐賀県唐津市菜畑遺跡では曾畑式に伴って出土している。

福岡県内の遺跡では玄界灘・遠賀川流域の北九州市楠橋貝塚・鞍手町新延貝塚などで轟B式土器が出土しており、岡垣町元松原遺跡で曾畑式土器が出土している。また、筑後川流域でも久留米市野口遺跡・甘木市柿原野田遺跡などで轟式・曾畑式土器が出土している。

中期

中期の遺跡は関東・中部地方に集中的に発見されているが、九州では前期に比べて著しい増加はみられない。土器は前半には並木式土器が、後半には阿高式土器が西九州を中心に分布する。これらの土器は胎土に滑石の粉末を含むことから前期の曾畑式土器の系譜をひくものと考えられる。なお、終末期には口縁部にのみ直線的な文様を施す坂ノ下I式土器が西九州で、西和田式土器が東九州で見られる。船元式土器は口縁部下部が膨らむ器形をなし、瀬戸内周辺部に分布する。

前期以来、漁労活動とともに植物性食料の獲得が生活の基盤となっていた。石鋸(第23図1)と呼ばれる長方形ないし台形の石器は銚として使用したと考えられているが、西九州海岸部の五〇以上の遺跡から出土している。また、長崎県つぐめのはな遺跡でも石鏃形の銚頭(第23図2)が二〇〇点以上出土している。一方、佐賀県西有田遺跡では二一基の貯蔵穴が発見され、内部からアラカシヤイチイガシ・チャンチンモドキなどが検出された。

後期

西日本では後期に磨消縄文土器が出現するが、その初頭に瀬戸内周辺に広く分布するのが中津式土器である。一方西九州では阿高式系の土器が存続している。その後、小池原下層式を

経て、中葉の小池原上層式・鐘崎式土器に至って、北部九州の磨消縄文土器は最も華美な装飾が施されることとなる。この時期の土器は口縁部が波状をなして、波頂部の下に渦巻文や入組文などを描き、橋状取手を付けるものもある。北久根山式土器になると、器面全体を貝殻条痕で調整し、口縁部を肥厚させ刻み目状の斜線文を施す。その後、西平式土器では口縁部が直線的に延び、端部で内傾する。胴部は球形に膨らみ、文様は直線的になる。終末の三万田式土器では縄文文様はほとんど消滅し、器面を黒色に磨研するようになる。

北部九州では貝塚が急増し、ヘナタリ・ウミニナ・ハマグリ・マガキ・オキシジミなどの内湾砂泥性貝類や、アジ・イワシ・スズキ・クロダイ・エイなどの沿岸底棲魚類が発見される。前期・中期以降に現れた各種の漁労具は引き続き多数発見されている。大分県西和田貝塚では骨製尖頭具が、大分県中津市植野貝塚では切目石錘が、福岡県玄海町鐘崎貝塚でも石製の銚や骨製のヤスが出土している。

住居跡内には土器炉・石組み炉などの施設が現れ、遺物でも土偶・土器片錘・扁平打製石斧など東日本の磨消縄文文化の影響がみられる。大分県中津市棒垣遺跡では石組み炉を持つ堅穴住居跡に複数の成人人骨が伸展葬されていた。また、北九州市寿命貝塚でも石組み炉を持つ円形住居が発掘されており、福岡県吉井町の法華原遺跡では扁平打製石斧と石皿・磨石などが出土している。土器片錘は北九州市下吉田遺跡や岡垣町元松原遺跡から出土している。

晩期

晩期の土器には縄文を施さない黒色磨研の精製土器がある。一方、器面の整形が貝殻などの条痕やナデ調整のままの粗製土器が作られている。初期の御領式土器は、くの字形の口縁部

文様帯と胴部の肩に太い凹線と大きめの楕円形凹点を施す。その後、中ごろには体部が上位で膨らむ浅鉢が現れ、口縁端部にリボン状や鱗状の張り付けが施される。また、胴部上位に突帯をめぐらす甕形土器が出現する。後半になると、刻み目突帯文土器に壺が加わり、弥生時代へと引き継がれる。

晩期も後半代になると、北部九州の玄界灘に面する地域で水稻耕作に関連する遺構や遺物が発見されるようになる。北九州市長行遺跡では晩期中ごろの黒川式土器に粳圧痕が残るものが発見され、続く山ノ寺式の突帯文土器の段階でも唐津市菜畑遺跡から炭化米が出土している。また、福岡市板付遺跡・福岡県二丈町曲り田遺跡などでは突帯文土器単純期の水田遺構が発見された。後葉の遺跡から出土する太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石庖丁・石剣などは大陸系磨製石器と呼ばれ、水稻耕作を行う新来の集団によってもたらされた道具である。